
魔法世界の冒険者

鬼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界の冒険者

【Nコード】

N4968Z

【作者名】

鬼人

【あらすじ】

文明の進んだ人間達が住む世界とは別の空間にある魔法世界、竜の地。そこに冒険者と呼ばれる人間がいる。

暇を持て余す者、お宝が目当ての者、世界を見たい者、自身の信じた正義を貫く者、そういう人間が冒険者となる。

この物語はその冒険者達が織り成していく物語である。

ブローグ 目覚めし者

暗い、冷たい。体を縛り付けているのはどこまでも深い闇。その中でレイジオンは目覚めた。

バリイイーンッ！

ガラスを砕くような音で、体を縛り付けていた結界が解けた。だが、それ以外にも体を縛り付けているものがあつた。それは絶対零度の氷だつた。いくら目が覚めたとはいえ、この弱り切つた体ではこのまま動けずに死んでしまふだろう。だがすぐに変化があつた。

ドオオーンッ！

爆発音と同時に氷が跡形もなく吹き飛んだ。

？「久しぶりだな、レイジオン」

闇が晴れて、押し寄せてきた光の中から誰かが手を差し出してきた。今の声には聞き覚えがある。レイジオンは差し出された手を掴んで立ち上がった。辺り一面、白銀の雪で覆われている。そこからゴツゴツした岩がいくつも飛び出している。ここは…どこだ？

？「やっと見つけたぜ」

レイジオンの目の前に立っていたのはかつての戦友、ガレウスだつた。

レイ「ガレウス…お前…」

ガレ「全く、ここを見つけるのは苦労したぜ。なんせ手掛かりが一切無かったからな」

レイ「ということは…俺の封印は解けたのか？」

ガレ「そうだ。悪かったな、千年も待たせちゃって」

千年か、随分長い間封印されていたようだ。レイジオンは崖の方へ歩いていった。どうやらここは山のようなようだ。とてつもなく高い山だ。だが、全く身に覚えがない場所だった。

レイ「ガレウス、ここはどこだ？」

そう聞かれたガレウスは思わず声を上げて笑い始めた。

ガレ「どうやら長い間眠ってた所為でボケちゃったみたいだな。覚えてないのか？ここはデラド山だぞ」

ガレウスに言われてレイジオンはようやく思い出した。千年前、俺は竜の地の最北端の山脈地帯に封印されたのだ。

レイ「そうか、思い出したぞ。俺は千年前に…」

レイジオンの中で封印された当時の記憶が蘇ってきた。千年前、自分を長い眠りに陥れた女のことを思い出した。

レイ「ここまでされて、礼をしないわけにはいかないな」

ガレ「何がだ？」

レイ「俺を封印したあの女に礼をしなきゃならん」

レイジオンは厳しい目付きで遙か先の地平線を見つめた。

レイ「ガレウス、闇黒龍族^{ナーガ}はどうなった？」

そう聞いたのだが、何故かガレウスは何も答えなかった。

レイ「どうした？」

ガレウスは悔しそうに顔を歪めた。

ガレ「お前がいなくなってから俺達の力は弱まる一方だ。やっぱりリーダーがいなくていうのは仲間の士気にも響いてくる。だからお前を探し出して復活させたんだ」

レイ「なるほど、そういうことか」

レイジオンはまた地平線の方を見つめるとため息をついた。まさか千年で仲間の力がそこまで弱くなってしまつとは。予測できたことかもしれないが、レイジオンはずっと封印されていて意識がなかったので仕方がない。

ガレ「レイジオン、とりあえずここを離れよう。いつまでのこんなところにいたら奴等に見つかっちゃう」

レイ「それもそうだな。話は後でじっくり聞くとしよう」

二人はすぐにその場から飛び去った。

第一話 魔族対策会議

竜の地の最南端にあるフェアーナ王国。その首都であるレッザンに女神の騎士団という冒険者ギルドがある。冒険者とは、所属しているギルドで発注された依頼を受けたり、所金首を捕まえたりする者のことである。また独自で環境の調査をしたり、お宝を探しにいたりもする。

冒険者は竜の地のいたるところにいる。旅をして世界の美しさを知ろうとする者、正義の味方を名乗り魔族から人々を守る者。理由はそれぞれ、いろいろな者が冒険者になる。

）　　）　　）　　）

？「また貴様は面倒事を起こしおって！」

会議室に入るなり、ナウルはギルドマスター補佐のデイスケンスに怒鳴られた。

ナウ「…は？」

ナウルは状況が掴めず、とぼけた声を出した。

デイス「とぼけるな！お前のやったことの報告が来ていないとも思っているのか！」

このじーさんは何に対してキレてるんだ？

ナウ「俺がなんかやったかあ？」

大声で怒鳴る老人ととぼけた顔の青年を見て、既に席についていた仲間は俯いて必死に笑いを堪えている。

デイス「昨日、街で喧嘩をやったじゃろうが！知らんとは言わせんぞ！」

ナウ「知らないなあ」

ナウルがへらへら笑いながらそう言つと、デイスケンスの額に血管が浮かんだ。

デイス「巫山戯るな！ええ加減にせい、この小僧が！」

ナウ「嘘だよ。昨日の昼間の喧嘩だろ？しつかり覚えてるよ」

昨日は確か、喧嘩を売ってきた中年のおっさんを四、五人ボコボコにしてやった。…つて、なんで俺が怒られてるんだ？

デイス「貴様これで面倒を起こしたのは何回目じゃ、え？答えてみるい！」

ナウ「おいおい、ちょっと待てよじーさん。先に喧嘩売ってきたのは向こうだぜ。俺は被害者だ」

そうは言ったものの、デイスケンスはナウルの言い分など全く聞いていなかった。

デイス「九人全員に大怪我させておいて何が被害者じゃ！口答えするな！」

九人？そんなにいたっけ？

ナウ「じーさん、襲われた方が自分の身を守るために仕方なく攻撃することを正当防衛って言うんだぜ。知ってるか？」

デイス「口答えするな！」

まったく、なんでこう頭の固い人間って自分の意見を人に押し付ける癖に、人の意見は聞こうとしないんだ？っていうか、でかい声で唾飛ばすんじゃないよ。汚ねえだろうが！

ナウ「あのなあ、少しは俺の話も聞けよ」

デイス「大体何様のつもりじゃ、貴様は？面倒事ばかり起こすくせに会議に遅れて社長出勤のつもりか？おまけになんじゃ、その口の聞き方は！」

駄目だ。まったく聞いちゃいない。

ナウ「とりあえず落ち着けてじーさん。大声出していると体に毒だぜ？」

デイス「だからなんじゃ、その口のきき方は！」

ナウルはフウゥとため息をついた。これでは全く話が進まない。まあ、俺が頭を下げれば済むだろうが、そこを譲るつもりは微塵もない。

デイス「大体貴様、冒険者としての自覚はあるのか？」

ナウ「冒険者としての自覚？どういうことだ？」

デイス「我々女神の騎士団はあくまで平和と正義を掲げて行動しておる。その誇りを背負っているという自覚があるのかどうか聞いておるのじゃ！」

「そんなモンあるわけねーだろwww」と鼻をほじりながら言っteryたいが、流石にそれはやりすぎな気がするので自重した。

デイス「どうなんじゃ、え？答える！」

ナウ「当たり前だ。有るに決まってるだろ」

デイス「だったらもっと、それらしい行動を…」

ナウ「と言うつても思っていたのか？」

その一言で会議室の中は笑い声に包まれた。今まで俯いていた他の仲間が耐えられなくなったようだ。

『アツハツハツハツハ！ヴァツハツハツハツハツハ！』

中央に置かれた大きなテーブルをたく者、腹を抱えて涙まで流している者など様々だが、デイスケンス以外の全員が笑っていることは間違いない。その笑い声の中で、デイスケンスの額の血管が切れる音がナウルにはハッキリ聞こえた。

デイス『静かにせい！！』

叱声と同時に真っ白だったデイスケンスの白髪頭が金色になって逆立ち、体からは膨大な量のオーラが立ち上っている。そして、その貧弱そうな体からは想像もできないほどのエネルギーが発せられ、会議室が吹き飛んだ…

ナウ「なぐんてことが出来たら、このジーさんは最強なんだがなあ」

ナウルは内心でくだらないことを考えながら、そう呟いた。

デイス「貴様、わしを馬鹿にしておるな！」

デイスケンスの「静かにせい！！」の叱声で、会議室は流石に静かになった。だがまだ何人かが、クスクスと笑っている声が聞こえる。

ナウ「これが真面目なこと言ってる態度だと思うか？つーか我々女神の騎士団はって、あんたはギルドマスターじゃないだろ？何偉そうに喋ってんだ？」

デイス「黙らんか、この青二才の小僧が！！」

ナウ「俺を青二才って言うんなら、俺以上の功績を上げてみるよ」

？「ナウル、その辺にいなさい」

そうナウルに言ってきたのは、テーブルを挟んだ向かいにいるカチユア・ドラコニクスだ。

カチユ「デイスケンスもそのぐらいにして、会議を進めてください」

カチュアは女神の騎士団の中でも、優秀な成績を収めてきたエリート冒険者である。その為、ギルド内での発言力も強い。だが入り口のドアの前にずっと立っていたナウルは見ていた。さっき一番笑ってたのはこいつだ。どうやら、このジーさんは気づいてないらしい。

デイス「うむ、そうだな。この小僧と違って、カチュアは優秀で助かる」

その優秀なやつと笑いの土台にされてんのがあんただけだなwww。
ナウルは取りあえず、カチュアの右の席が空いていたので、そこに座った。

ナウ「ありがとな、カチュア」

ナウルは他には聞こえない小さな声で、カチュアにそう言った。

カチュ「どういたしまして」

カチュアはパチツとウィンクした。まあ、これは予想できていたことだ。デイスケンスをキレさせれば、必ずこいつが止めに入ってきて、丸く収まるとわかっていたからやったのである。ナウルは笑みを浮かべながら、正面のデイスケンスの方を見た。

デイス「よし、では今から緊急会議を始める。ではナウル、さっそく出番じゃ。お前が来なければ始まらんかったでいう」

カチュア効果恐るべし。デイスケンスの機嫌は、今までとは比べようもないほど良くなっていた。

ナウ「はいはい。じゃあ、報告させてもうぜ」

ナウルは持っていた書類を開いて立ち上がった。

ナウ「十一月から十二月の一月間に、俺が調査してきたことを報告する。北隣のガルドライトとの国境にある、悪霊の山脈では著しい変化が見られた。これは俺の勝手な見解に過ぎないが、一、二年前に比べ、魔族の数が倍以上になっている。幾つかあった小さな村は一つも残っておらず、人が住める環境ではなくなっていた。そして通常では絶対にありえない魔族が群れを作るといふ現象も起きていた」

ナウルの報告を聞いて、デイスケンスは眉間に皺を寄せた。

デイス「実際に調査に行つて見てきたお前はと思う、ナウル？やはり中央平原の影響がここまで来たと思うか？」

ナウ「まだ断定はできないが、その可能性が高いな。中央平原に魔族が現れて、もう三か月になる。そろそろ、竜の地全土に広がつてきてもいいころだ」

中央平原とは文字通り、竜の地の中央部のことである。多くの国が集まり、人間の文化の中心と言つてもいいだろう。その中央平原に三か月ほど前から突然、どこからともなく大量の魔族が現れて町や村を襲い始めた。酷い時には大きな都市まで襲われることがあり、その尋常ではない被害が問題になっている。

ナウ「俺の掴んだ情報では、既にガルドライトでは人が襲われ始めてる。ここに来るのも、時間の問題だな」

ナウルは落ち着いた表情でそう述べた。だが、ほかの仲間は落ち着

いていなかった。皆、口々に小声で喋り始めた。

「魔族が攻めてくるんだろ？俺、田舎に戻って家族に知らせないと」

「これって国中の問題だろ？どうやって戦うんだ？」

「やっぱり軍も動くのかな？それぐらいじゃないと勝てないと思うけど」

ナウ「なあ、ちょっといいか？」

ナウルは話している他の仲間を無視して、デイスケンスに聞いた。

デイス「なんじゃ？」

ナウ「よく考えてみたら、なんで俺たちがこの問題について話し合ってるんだ？こんなでかい問題、普通は王宮が話し合うことだと思うが？」

正確に的を射た質問だった。一体王宮の連中は何やってるんだ？

デイス「仕方ないじゃろ。王宮から使者が来て、陛下直々に頼まれたんじゃ。断るわけにはいかんよ」

ナウ「陛下って…クレアだろ？」

デイス「ナウル、ここはあくまで重要な会議の場じゃ。陛下を呼び捨てにするでない」

ナウ「へいへい。でもそれって」面倒だからあそこに任せれば何と

かしてくれるんじゃない？」「ってことだろ？」

デイス「使者殿は、実力者の集まる女神の騎士団に是非ともお願いしたい、仰っておった。きっと陛下も我々の力を信用してくださっておるのじゃ」

ナウ「あ、そうすか」

まったく、面倒な事押しつけやがって。実力者が集まるだって？命を簡単に投げ出すような戦い好きの野蛮人ばかりだから、って言えばいいだろ！

デイス「とにかく、使者殿には早急に対策を立てて、王宮に提出するように言われておる。そこで、何かいい案がある者はおらんか？」

全員が話すのをやめて、デイスケンスの方を見た。その中でナウルは一人、手を上げていた。

デイス「何かあるのか、ナウル？」

ナウ「今すぐ国中の軍隊を動かして、魔族の殲滅に向かわせろ。それなら確実だ」

デイス「それでは何人の犠牲が出るかわからんぞ。それに莫大な費用も掛かる」

ナウ「そこは国が何とかしてくれると思うが…じゃあ、どうするんだ？軍が動かないんじゃないでしょうか？どうしようもないぜ。ただ魔族が攻めてくるのを、プルプル震えて待ってるしかないな」

デイス「そうじゃなあ……やはり軍に頼るしかないかのう」

ナウ「一応、それで提出すればいいだろ。それで却下されたら次の案を考えればいい」

デイス「そうじゃな、カチュアはどう思う？」

カチュ「私もそれでいいと思います」

デイス「うむ、そうか。皆もこの案でよいか？」

デイスケンスの問いかけに全員が頷いた。

デイス「ではわしは報告書の作成に取り掛かる。今日の会議はこれでおしまいじゃ」

そう言うときデイスケンスは会議室から出てった。

ナウ「フゝ、終わった終わった」

ナウルはテーブルの上にドカッと足を乗せた。

カチュ「本当にあんたも懲りないわね」

カチュアはニコニコ笑いながら、ナウルに向かっていった。

ナウ「何がだ？」

カチュ「喧嘩のことよ。一週間前に調査から帰ってきたばかりなのに、もう厄介起こすなんて」

ナウルは声をあげて笑った。既に会議室の中はナウルとカチュア以外はいなくなっていた。

ナウ「まあな。でも、本当に面倒なこと押し付けてくれたな、王宮のやつらは」

カチュ「そうね。クレアとレオルは何考えてんだか」

ナウルはテーブルから足を下ろしてカチュアの方を見た。

ナウ「今回の件、依頼してきたのは多分あいつらじゃないぜ」

カチュ「え、なんで？」

カチュアは首をかしげた。

ナウ「よく考えてみるよ。レオルは責任感あるやつだから、人に問題を押し付けたりしない。それにクレアだって、レオルがいたらあいつの案に従うはずだぜ」

カチュ「じゃあ、調査の依頼をしてきたのは？」

ナウ「大臣共が勝手にやったんだろ。でもレオルがそれを見逃すはずないから、多分あいつには何も言っていない。そうすると、あの二人は魔族が来てることすら知らないだろうな」

カチュ「フーン、なるほどね」

今のナウルの意見はただの予想に過ぎないが、間違っているとは力

チュアは思わない。何故なら、ナウルの予想は外れたことがないからだ。四年前、同じ十七歳の時に女神の騎士団に入ってその時から付き合いたが、こいつの予想が外れたところは一度も見たことがない。

カチュ「ってことは、さっきのナウルの案はどうなるの？」

ナウ「ほぼ100%却下だな。軍を動かすには国王の許可がいるから」

カチュ「じゃあどうするの？」

ナウ「レオルのことだ、すぐに気付くだろ。対策立てるのはそれからでも遅くないさ」

カチュ「でもクレア達がこのこと知っても、結局は軍が動くことになるんじゃない？魔族には小細工なんて通用しないし」

ナウ「まあ、そうだな。それが俺みたいなのを少人数で行かせるって手もありだな」

カチュ「ああ、それいいわね。でもディスケンスがいいって言うとは思えないわね」

ナウ「下手に小さい軍隊動かすよりマシだろ。一万そこそこの兵力じゃあ、魔族の大群には全く歯が立たないからな」

魔族の中には、人間でも倒せるような奴も幾つかいるが、基本的に普通の人間では全く歯が立たない。噛み付かれたり、飛び掛かられたりするだけならともかく、強力な魔法を使うような奴もいるから

だ。

カチュ「あ、そういえばさっき魔族が群れを作るって言ってたわよね。それって何がおかしいの？」

ナウルはカチュアの為に説明することにした。まあ、こういうことは知らないのが普通だからな。

ナウ「魔族は俺たち人間と違って、自我が強烈で一体一体異なってる。だから魔族同士でも、違う種類のやつが近くにいると、自分の存在を主張しようとして争いになるんだ。わかるか？」

カチュ「びみよ」

カチュアは真剣な顔でナウルの話聞いていたが、あまり理解できないようだ。大丈夫だ、心配するな。それが普通だ。

ナウ「そうだな。例えばチンピラが二人いたとして、その二人がバツタリ向かい合わせになったらどうなる？」

カチュ「喧嘩になる？」

ナウ「そうだ。魔族も同じで、例えばドラゴンと巨人が向い合せになったら喧嘩ってレベルじゃないような戦いになる。でも俺の行ってきた悪霊の山脈では、いろいろな種類の魔族が幾つもの群れを作ってたんだ」

カチュ「なるほど。つまりバツタリ出会ったチンピラが、喧嘩しないで仲良く手を取り合ってるってことね。それは異常ね」

ナウ「ハッハッハ、そういうことだ。さてと…一階に行くぞ、カチユア」

ナウルは席から立ち上がった。

カチユ「ん？なんかあったの？」

そう聞くと、ナウルはなぜか笑みを浮かべた。

ナウ「あいつが帰ってきたみたいだ」

カチユ「あいつって？」

ナウ「行つて見りゃわかるさ」

ナウルは笑みを浮かべたまま、会議室を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4968z/>

魔法世界の冒険者

2012年1月9日13時45分発行